



令和元年度第1回班会議、議事録

NEWS LETTER

令和元年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会における救急・災害医療提供体制に関する研究」

Vol.1.

July 16th./2019

1. 日時： 令和元年7月16日（火）
16時00分～18時00分

2. 会場： 日本救急医学会事務所

3. 出席者：

木村昭夫，小井土雄一，齋藤大蔵，
溝端康光（坂本哲也代理），森村尚登，
山口芳裕，横田裕行（順不同），
野口航（オブザーバー：厚労省医政局地
域医療計画課），廣瀬美知子（事務局
担当）（順不同）（全て敬称略）

～議論した内容～

I. 昨年度の実績と今年度の研究目的

厚労省の野口先生にご挨拶を頂いた。
前年度の研究で①通常の救急医療体制を
維持、②大会期間中に特化した救急・災
害医療体制、③多数傷傷病者発生時、テ
ロ等の対応が検討された。②では、ど
の会場の医療資源が不足するかを検討し、
東京都やJOC等の関連組織に情報提供し
た。また、熱中症対応や雷撃症患者の対
応や医療スタッフ教育のための教材作
成、外国人対応、診療録、③では会場周
辺の集中治療施設、熱傷対応施設、化学
テロ等に対する急性中毒対応施設の実態
を調査した。また、医療施設でのテロ対
応マニュアル作成に取り掛かった。

今年度は上記の成果物をもとに、会場
やラストマイル、診療所や救護所で医療
スタッフが携帯可能なリーフレットを作
成することを大きな目的とした。さら
に、今回の競技会のみでなく、将来に開

催される大規模イベントの医療対応にも
使用できる成果物を作成することも目的
としている。

II. 分担研究者

1. 木村班（日本外傷学会）

前年度に銃創、爆傷等マニュアル、簡
易パンフレットを作製した。マニュアル
は根本治療を想定した専門家向けの内
容で、後者は現場のFirst responderも理
解可能な内容とした。なお、今回の班
会議でトリアージはSALTではなく、原則
としてSTARTを使用することが確認され
たが、熱傷等では重症度の判断をさら
に考慮する必要があるとの意見が出さ
れた。なお、写真等を掲載する際には
著作権等も考慮することが確認された。

2. 小井土班（日本災害医学会）

観客やラストマイルでの診療記録はJ-
SPEEDを使用することで検討が進んで
いる。使用方法に際してはe-learningを
利用した教材を考慮しているが、実際
の対応は今年度決定する。なお、J-
SPEEDが診療録として認められるか、
個人情報保護に問題ないかは確認して
行く。

3. 齋藤班（日本熱傷学会）

前年度は現場の診療所で使用するた
めの「熱傷初期診療施設における12の
Q&A」を作成し、雷撃症への対応で
落雷対応フローチャートを作成した。
また、千葉県で100名の熱傷患者が
発生した装置で、広域搬送の模擬訓
練を行った。出席者からは落雷対応
に関する医学的なテキ

ストは極めて重要であり、避難の在り
方を加えることでさらに有用になると
の意見がだされた。今年度はそれも踏
まえ、さらにブラッシュアップしてゆ
くことになった。

4. 坂本班（日本臨床救急医学会）

前年度作成した訪日外国人医療と熱
中症に関するガイドラインの要点をリー
フレットの形でまとめるように横田か
ら依頼をした。また、FOPで救護を担
当する医療者への教材を関連学会と協
議して作成を進める。

5. 森村班（日本救急医学会）

都内の会場における医療ニーズと医
療供給体制を考慮し、300人の傷病
者が発生した際の搬送シミュレーション
を行った。その結果を会場周辺の医療
体制構築のために引き続き東京都、
JOCに提供してゆく。また、今年度
は指標を増やしてより正確なシミュ
レーションを行い、その結果を公表し
て行く。

6. 横田班（日本救急医学会）

医療機関がテロ攻撃を受けにくくす
るための方策や攻撃を受けた場合の
対応に関して前年度は検討し、アク
ションカード等を作成した。今年度
はさらに検討を加え、テキスト化す
る方針である。

III. 今後の予定

今回欠席となった須崎班、川前班
には本日の議論の内容をお伝えする。
次回の班会議は本年12月を目途に
開催する予定とする。

（文責：横田裕行）